



京大病院 リスクマネージャーのみなさま、こんにちは。
本日は、「ゼロリスク」の考え方に潜む危険をお伝えしたいと思います。

項目：

1. リスクマネージャーからのご質問への回答

2. "ゼロリスク"の考え方に潜む危険

1. リスクマネージャーからのご質問への回答

2020/07/06 配信のメール・マガジンにご質問をいただきました。
ありがとうございます。双方向に理解を深めるためのやり取りは、
とても大切に、感謝申し上げます。

さて、頂戴した質問は、前回、「計画された脆弱性」の例示とした
硬膜外カテーテルの接続部外れに関することでした。
現場では、チューブの部分が引っ張られないように衣服にクリップで
止めたり、あるいは、接続部が複数あれば、その一部をテープで巻いたり
という工夫をされています。それについてはどうでしょうか？
というご質問でした。
「容易に外れないように」工夫することは、そのまま継続してください。
ただし、その結果外れたとしても、それは、そこで外れてよかったね、
という考え方で結構です。

硬膜外カテーテルのチューブ接続外れについて、2014年に院内で協議した
ことがあります。

医療安全管理室からメーカーに対策をお願いし、メーカーから、「外れない
ような改良」を提案いただきました。それを院内で関係者と協議しました。
その際、メンバーの医師から、次の意見がありました。

「異常に強い力が接続部にかかることが、外れる根本的原因であろうと
推測されます。

メーカー提案の対策を講じた場合、接続部以外の部分に力がかかってしま
うと予測されます。

この場合、カテーテルが(接続部以外の部分で)断裂する可能性があり、

最悪の場合、体内に遺残してしまう可能性があります。
こうした危険性を冒してまでメーカー提案の対策を講じる必要は低いだらう
と思います。」

なるほど！と思いました。リスクをゼロにしようとして、対策を講じる結果、
より脆弱な部分で、大きな害をもたらすことはあります。

ですので、患者さんの安全を考える際には、その対策をすり抜けた際の被害の
大きさを想定して、ほどほどの対策にとどめておくのがよいかと思います。

2. ”ゼロリスク”の考え方に潜む危険

災害対策から、医療安全を学ぶと勉強になります。
最近の治水対策の考え方から・・・。

想定を超える雨量になった際に、河川が決壊して人間に大きな被害を
もたらすことに対するリスク対策：

「被害が少ない部分で堤防の高さを低くしておいて、そこであふれさせる」
従来は、想定される最大雨量に合わせて、堤防を高くするという治水対策
でしたが、それはときに、甚大な災害につながります。

ゼロリスクを求めるとかえって被害が大きくなることが分かってきました。
堤防は一律に高くするのではなく、人の住む地域では高くする一方で、
畑や水田を流れる部分ではわざと低く設定し、あふれる予定の場所を
あらかじめ作っておく計画です。もちろん、実際に農業に被害が出れば、
その被害を金銭的に補償する必要があります。

実際に被害が発生したときに、どの程度の大きさになるか？

ということを意識することを、医療安全にも取り入れていきたいと思います。

リスク対策で困ることがあれば、どうぞ医療安全管理室にご相談を！

*** 今回は、いただいたご質問からゼロリスクの考えをお伝えしました ***